

第2章 太宰府市の維持向上すべき歴史的風致

はじめに

太宰府市は、日本古代における大宰府の設置以来、多様な人々の往来ある都市的な場として息づいてきている。それを物語るように、多様な文化財・文化遺産が市域のいたる所に残され、相互が結びつき多様な関連文化財・文化遺産群を構成している。

これら関連する文化財・文化遺産群の中で、未来の市民に継承するための市民による育成活動と、そこにまつわる太宰府固有の物語を結びつけ、平成 22(2010) 年 12 月から太宰府市民遺産制度を始め、太宰府市景観・市民遺産会議の設置ならびに太宰府市民遺産の認定を開始した。

太宰府を語り、未来の市民に継承するモノは、同時に維持向上すべき歴史的風致と重なる部分もあり、将来的には市民が認める太宰府市民遺産が維持向上すべき歴史的風致へと広がっていく。

1 太宰府天満宮神幸式における歴史的風致

神幸式は太宰府天満宮を代表するお祭りであり、平安時代より続けられ太宰府の人々にとって季節の節目の行事となっている。毎年 9 月に行われ、中心となる神幸は秋分の日とその前日に古代からの街の骨格を引き継ぐ道筋で行われる。

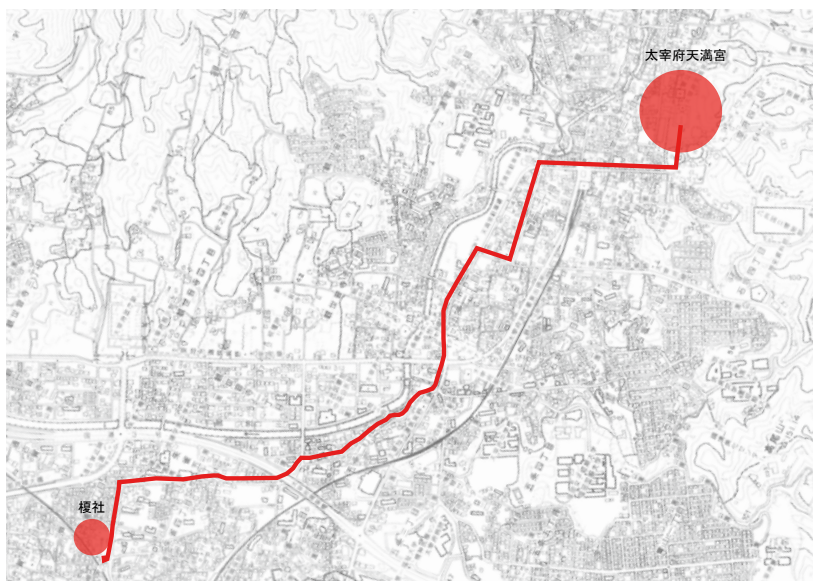
●太宰府天満宮と菅原道真

神幸式は太宰府天満宮の祭神である菅原道真の波乱の生涯と深い関連にある。道真は平安時代の文人貴族の家系に承和 12(845) 年に平安京で生まれ、そ

の文才は幼少より注目されるものであった。宇多天皇に重用され 33 歳で家職とも言える文章博士(もんじょうはかせ)に任じられ、文人政治家として右大臣に上り詰めたが、左大臣藤原時平の計略により昌泰 4(901) 年に大宰権帥(だざいのごんのそち)に左遷された。太宰府では政庁に出仕することなく、「南館」と呼ばれる官舎で過ごし、悲嘆のうちに延喜 3(903)



天満宮境内絵図(慶応 3(1867) 年)



天満宮と榎社の位置関係と葬送の道

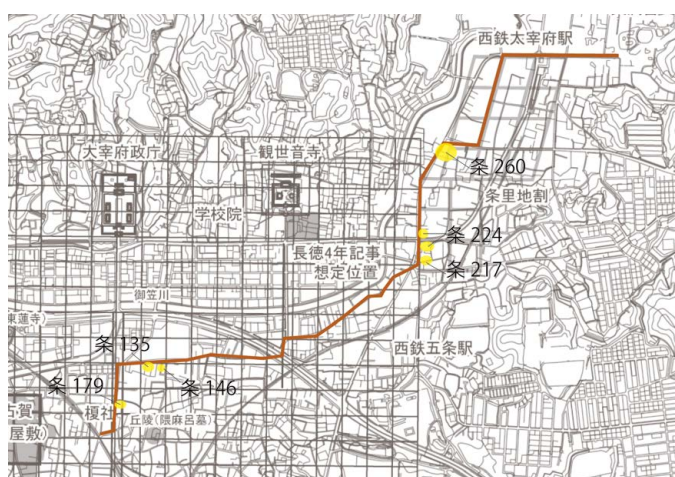
ら榎寺と呼ばれるようになったと伝えられる。明治元（1868）年の神仏分離により、現在は榎社と呼ばれている。

●神幸式の歴史

神幸式は菅原道真の神霊をなぐさめると同時に五穀豊穡を感謝する太宰府天満宮の重要なお祭りであり、福岡県無形民俗文化財に指定されている。平安時代には大宰府に赴任した官人である大江匡房により康和3（1101）年に始められ（「古今著聞集」巻4）で以来続けられてきた祭である。菅原道真の神霊を天満宮本殿から神輿に移して、世話になったもろ尼御前が祀られる榎社に年に一度のお礼に行くという意味を持つものである。神幸経路は南館から道真の葬列がたどった道を天満宮から逆方向に辿り往復するものである。行列の先頭に護行の鐘・太鼓があり「どん・かん」と鳴らしながら進むため、経路をいつしか「どんかん道」と呼ぶようになった。またこの経路は大宰府条坊と呼ばれる古代に設置された道にほぼ重なっている。大宰府条坊は太宰府市から筑紫野市にかけて広がる平地に、古代に東西南北に碁盤目のように設定されたまち区割である。平安時代の「観世音寺文書」や「宇佐大鏡」の史料に「左郭・右郭、条・坊」を使用して場所を示しているものがあることからその存在は知られていたが、地道な発掘調査によりその存在が確認されることとなった（「太宰府市の文化財 大宰府条坊跡 40」平成 21（2009）年など）。河川の影響などで変化している箇所



条坊跡の発掘調査と神幸行列



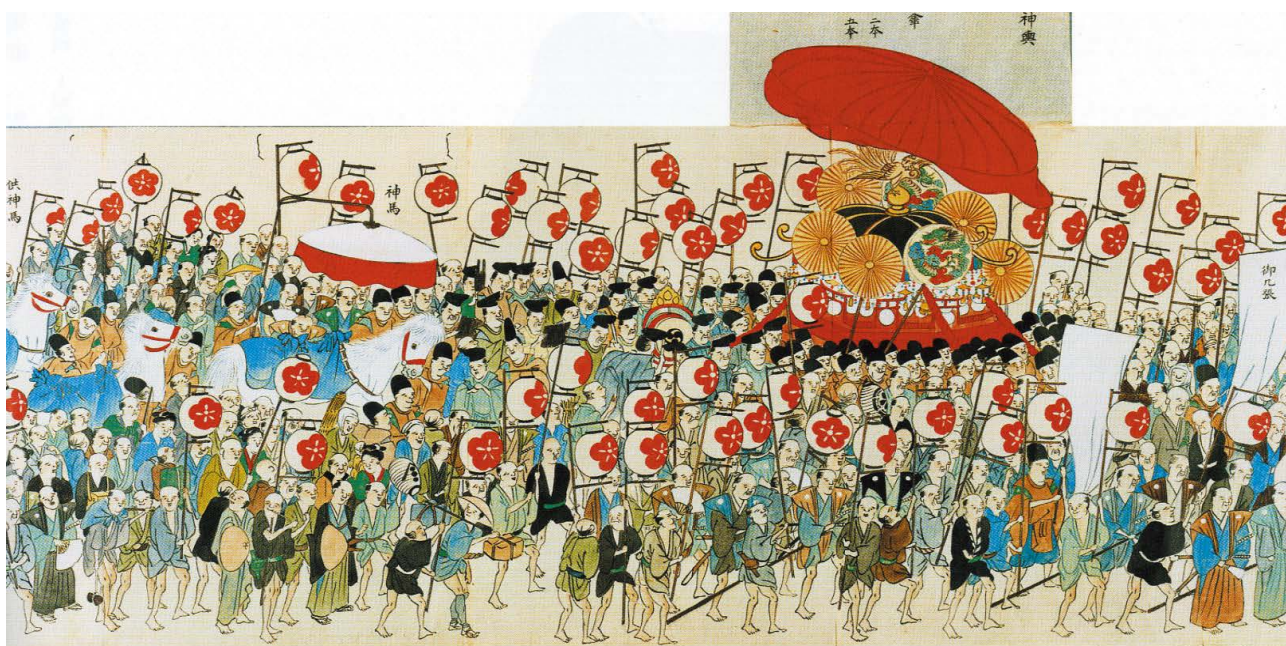
どんかん道沿いの発掘調査地点



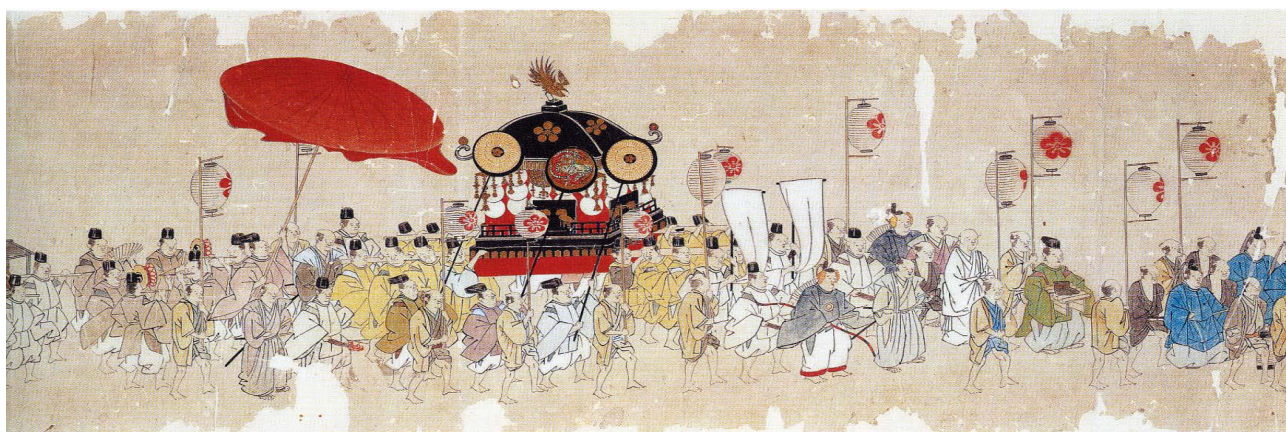
天満宮神幸の図（筑前名所図会）

もあるが、神幸経路では平安時代以来道路であった場所が6地点で発掘調査されている。神幸式が開始されたころの太宰府は、2km四方ほどの大宰府条坊であり、大宰府政庁を北辺に据え、そこから幅15mの南北の朱雀大路（中央大路）が伸びていた。東西を条路、南北を坊路と呼び、南館にあたる榎社は右郭十二条一坊にあたる。太宰府天満宮一帯は大宰府条坊の郭外であるが、平安時代まで遡る南北軸が東に振れるまち区割が発見されている。江戸時代、太宰府の旧蹟を表した絵図にも条坊を反映した道が記されており、神幸経路が歴史的な市街地構造を継承していることを示している。

神幸式の内容は、室町時代後半に書かれたと考えられる「太宰府天満宮社役年中行事」には七月晦日の注連うちから二十四日の竟宴で竹の曲が奏されるまでが記されている。近世地誌である「筑前国続風土記」（貝原益軒、元禄16（1703）年完成）にも人数をはじめ神幸の詳細が記載されており、「遠近より来て、神輿にしたがふ者多し」と賑やかな祭礼であった。また、「筑前名



神幸式絵巻（嘉永本）



神幸式絵巻（元治本）

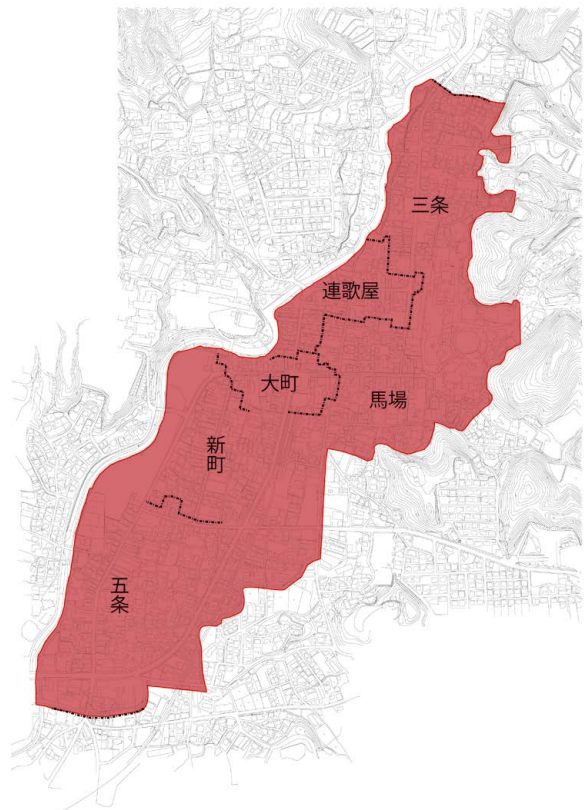


昭和 20 年代の様子（榎社）



昭和 32 年の様子（大町）

所図会」（奥村玉蘭、文政 4（1821）年）では、「春秋の大祭なり。其賑ひは関西第一と唱す」と記され多くの人々を集める大きな祭礼となっていた。そのなかでも大きな変化は太宰府天満宮が所蔵する 2 本の「神幸式絵巻」に現れている。「嘉永本」と「元治本」と呼ばれともに江戸時代末のものである。嘉永 6（1853）年に作成された「嘉永本」には別当や文人などの社家のほかに、武士町人農民の老若男女が賑やかに供奉している様子があり、「筑前国続風土記」や「筑前国続風土記附録」の絵図、「筑前名所図会」の雰囲気がよく伝わる。一方、「元治本」は「嘉永本」と同じ作者により元治元（1864）年に作成されたが行列に供奉する庶民は描かれておらず、厳かに肅々とした雰囲気に表現されている。奥書によると別当大鳥居信全が格式をもった祭として安政年間に整備したことが記されている。現在は「元治本」の供奉する社家が僧形から神職に変わった他は、ほぼ同じ行列模様で行われている。



門前六町の範囲

●神幸式の担い手

【担い手の組織】

神幸式の運営は太宰府天満宮の他に上三町（三条、連歌屋、馬場）、下三町（大町、新町、五条）と言われる門前六町と三条の分かれの松川、五条の分かれの高雄、さらに竈門神社と天満宮の二重氏子である内山・北谷が加わって行われる。天満宮は祭儀部が中心となり段取りを行う。各町には 15 歳から 25 歳の若手、26 歳から 40 歳までの中老があり、その上は各町の祭儀係り、宮世話

先払 大紋手丸 稚児 大花車(牛)白丁八人 (御上り) 一ノ高張 法被一人 高張 馬廻り直垂一人 (騎馬) 側大紋手丸一人 馬廻り直垂一人 五行高張 法被一人 面鉾 白丁一人 幣帛 白丁一人 鉾 白丁一人	太鼓 鐘 白丁五人 二ノ高張 法被一人 旗 二ノ高張 法被一人 ちりめん赤 法被二人 旗 ちりめん赤 法被二人 旗 ちりめん赤 法被二人 旗 ちりめん白 法被二人 旗 ちりめん白 法被二人 旗 三ノ高張 法被一人 三ノ高張 法被一人	大榎 白丁三人 四ノ高張 法被一人 花車牛 白丁七人 駒形 狩衣一人 袴重 狩衣一人 五ノ高張 法被一人 鉄杖 大紋一人 菊紋高張 法被一人 御倫旨辛種 白丁二人 六ノ高張 法被一人 巫女二人 付添 竹曲 六ノ高張 法被一人 巫女二人 (御上) 高張	法被二人 竹曲 獅子 白丁二人 七ノ高張 法被一人 弓 狩衣一人 弓 狩衣一人 太刀 直垂一人 太刀 直垂一人 八ノ高張 法被一人 御剣辛種 白丁二人 九ノ高張 法被一人 鉄杖 大紋一人 鉄杖 大紋一人 真禰 白丁二人 欄宜 法被一人 馬廻り直垂一人 欄宜(騎馬) 側大紋手丸一人 馬廻り直垂一人 十ノ高張 法被一人 先払 大紋手丸 箱提灯 白丁一人 伶人 箱提灯 白丁一人 高張 法被一人 樂太鼓	法被四人 伶人 赤丸 六張法被六人 衛士 社家一人 几帳 狩衣二人 衛士 社家一人 几帳 狩衣二人 与丁頭 直垂三人 取締 手丸 御神輿 營 騎狩衣一人 金駒 直垂一人 營 騎狩衣一人 奥丁 狩衣五十八人 取締 狩衣一人 奥丁頭 錦蓋 直垂二人 取締 手丸 直垂三人 赤丸 六張法被六人	正大工 幕箱 白丁三人 十一ノ高張 法被一人 神馬 法被一人 馬廻り直垂一人 神馬 口取白丁一人 馬廻り直垂一人 神牛 口取白丁一人 十二ノ高張 法被一人 宮司 法被一人 馬廻り直垂一人 宮司 側大紋手丸二人 馬廻り直垂一人 十三ノ高張 法被一人 權宮司 法被一人 馬廻り直垂一人 (騎馬) 口取白丁二人 側大紋手丸一人 馬廻り直垂一人 十四ノ高張 法被一人 權欄宜 法被一人 馬廻り直垂一人	權欄宜(騎馬) 側大紋手丸一人 馬廻り直垂一人 十五ノ高張 法被一人 權欄宜 法被一人 馬廻り直垂一人 權欄宜(騎馬) 側大紋手丸一人 馬廻り直垂一人 責任役員 法被一人 氏子会長 法被一人 氏子会長 手丸白丁一人 責任役員 手丸白丁一人	責任役員 手丸白丁一人 旗 法被一人 市長 法被一人 市長 白丁手丸一人 市市長 市市長 市市長 牛主水干一人 崇敬者總代 法被一人 崇敬者總代 手丸白丁一人 飛梅講社 法被一人 飛梅講社 法被一人	飛梅講社 手丸白丁一人 太宰府会 法被一人 太宰府会々々長 氏子会役員 法被一人 氏子会 市議會 法被一人 市議會議員 高張(旗) 参与(区長) 法被一人 参与 飛梅講社員 敬神婦人会 有志、一般崇敬者
--	--	--	---	--	---	--	---	---

行列の順番

人や総代がいる。神幸行列については神輿を舁く与丁を中心に若手が活躍する場となっているが、最近では中学高校の生徒の参加が多くなされている。当番町は御笠川の上流から「川流れ順」になり、注連打ちや相撲の準備を行う。近年は当番は応援町を入れ二町で行っている。

【行列の構成】

神幸行列の受持ちは各町ともに、与丁8人、太刀、弓、鉄丈、旗各1人、榊童2人と駒形童は五条より、護行の鐘・太鼓は川流れ順などが決まっているがその他は供奉割協議会で毎年割り当てを決める。

お下りでは約400人の供奉で200mほど、お上りには700人くらいが供奉し300mほどの長い行列となり、身にまとった平安装束がどんかん道を華やいだ雰囲気にする。行列は先払に始まり、護行の鐘・太鼓、諸道具に混じって竹の曲、神職、樂を奏する伶人、そして狩衣姿の58人の与丁に舁かれた神輿となる。さらに宮司をはじめ神職、



竹の曲

氏子会長をはじめとする役員、太宰府市長をはじめ近隣市町長など各界の人々、最後に一般の人々が供奉する。お下りには提灯などの灯火がつき従う。お上りには先頭に多くの稚児行列が加わる。

【竹の曲】

神幸に供奉する竹の曲は、室町時代に起源をもち、六座（米屋（古川家）・金屋（平井家）・小間物屋（安武家）・相物屋（古川家）・紺屋（船越家）・鍛冶屋（斎藤家）の座）の子孫のみで代々受け継がれて来ている。現在の構成員は13人で福岡県無形民俗文化財となっており、保存会にて維持されている。8月になると日曜を除いて稚児を務める家で毎晩練習をする。稚児は一

月 日	行 事	場 所	内 容
8月最終前土日曜日	注連打ち	境内絵馬堂	各所に張る注連を当番町が作る
8月最終前土日曜日	祈願	高尾山大行事	神幸式の無事と執行を祈願
8月最終土日曜日	注連打ち相撲	境内絵馬堂横	奉納相撲・豆すもうとり
9月1日	注連おろし		本殿で祓いを受け榎社周辺の注連を張る
9月11日	お道具出し	御宝庫	護行の鐘を合図に境内の茶店の人、神職により使用する道具を出す
9月14日	別火餅搗き	天満宮	六町の若手が参籠して別火餅を搗く
9月15日	潮井取り	紫藤の滝（天拝山麓）	早暁に潮井を取りに行く
9月18日	注連立て	馬場参道休與所ほか	各所の注連立て
9月20日	別火・潔斎		宮司が午後より別火・潔斎に入る、他神職は21日から
9月21日	大祭始祭	本殿	
9月22日	お下りの儀	天満宮から榎社	午後8時に御発輿
9月23日	お上りの儀	榎社から天満宮	午後3時に御発輿
9月24日	献饌祭	天満宮	
9月25日	千燈明	心字池周り	午後8時に一斉に燈明に点火

神幸式期間中の行事

人でササラ、扇をもち舞う中心的存在である。「筑前国続風土記」には「いにしへの田楽の余風にやといふ。一人にてまふ。猿楽のうたひのことくなる、うたひ物也」とあるものと一致している。楽器の締太鼓は室町時代のものが伝わる。

●神幸式の流れ

【神幸までの行事】

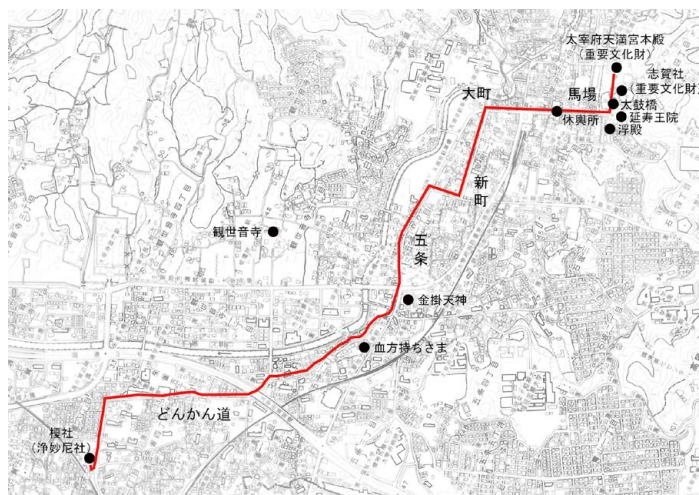
各行事は明治6（1873）年新暦に移行した後も旧暦の8月（新暦では9月）に行っていたが、新暦での日が一定しないため、明治44年から行事日程も新暦に移して9月に実施されるようになった。7月晦日の注連打ちが8月末になり、現在は月末から二週遡った土・日曜日に注連打ち、最終土・日曜日に奉納相撲などが行われる。注連打ちにつづき天満宮の南にあり、四方の平地を見渡すことができた高尾山大行事（標高151m）にて祈願祭が行われ、境内で行われる奉納相撲とともに、神幸式の安全無事を祈願する。

8月のうちに注連の準備を終え、9月に入ると注連はお祓いを受け、神幸の道を行列して榎社に向い、注連を張る。残暑の中榎社に張られた注連を見て秋が近いことを人々は知る。11日には行列の道具が神苑の茶店の人々と神職により御宝庫から出され、境内の絵馬堂や回廊に置かれ、神幸前日までに点検・組立などを行う。14日は六町の若手組が天満宮に参籠して別火で餅を搗き、翌日早暁に天拝山ふもとの紫藤の滝に潮井を取りに行く。18日には参道の休輿所などに注連立てが行われ、門前

でも祭りらしい雰囲気となる。休輿所の注連立ては、大きな孟宗竹が使われ高いところに白い四角の布を張る。これを「もろ尼御前のへこ（腰巻き）」と言い、追手に追われた道真をもろ尼御前が白に隠し自分の腰巻きをかけて匿った伝承を反映している。宮司は神幸の日の二日前から、



神幸までの主な行事場所



神幸の経路

神職は神幸の日の前日から潔斎に入り、別火して過ごし、神幸の日の初日に備える。

【お下り】

神幸初日は、神輿が天満宮から榎社に向かうお下りである。午後7時より護行の鐘と太鼓の「どん・かん」がゆっくりとした調子で打ち鳴らされいよいよ神輿が天満宮から榎社へ向かう神幸の開始を告げる。多くの人が見守る中、本殿に安置してある道真の神霊を神輿に移す遷御祭、出御祭が始まる。神職の「メッー（滅燈）」という声とともに本殿から回廊・楼門すべての灯りが消され、真闇のなかで、神霊は宮司により本殿から神輿に移される。移ると再び点灯され供揃いの後、与丁のお祓いをし、諸道具を受持ちに渡す。神輿は「お前おあと静かにおもりまして」という掛け声で与丁に昇かれて静かに移動を始める。神輿は黒漆と金の飾り金具の取り合わせが鮮やかで、四隅に吊るされた瓔珞や、垂幕に吊下げられた鏡などが灯りに反射して夜に映える。



天満宮境内模式図



闇に映える神輿



太鼓橋を渡る行列



もろ尼御前のへこ

大正3（1914）年に再建された楼門をくぐり、南下して心字池にかかる太鼓橋を渡って行く。これらの橋は延宝2（1674）年に福岡藩主黒田光之により木橋から石橋へ改修されたもので、中島には文化2（1805）年建立の今王社や長禄2（1458）年建立で本殿が重要文化財である一間四方の入母屋造檜皮葺きの志賀社がある。橋を渡る際には神輿が傾かないよう上下三町それぞれから一人選ばれた者が「お前お静かにお上げまして」「お後お静かにお下げまして」など優雅なことばで誘導する。与丁は掛け声にしたがい神輿の高さを水平に保って昇っていく。太鼓橋を渡り終えると、鎌倉時代末に建てられた石鳥居（福岡県指定有形文化財）をくぐり、現宮司邸である延寿王院の前を西へ折れ、参道へ出て行く。参道中程にある石鳥居の手前にある「もろ尼御前のへこ」がかかる休輿所にて一度留まり、居ずまいを正す塵払いの儀が行われる。その後、斎垣があった通りを越えて神輿はまちに出て行く。下三町の通りを大町―新町―五条とゆっくりと神幸していく。沿道の家は献燈の提灯をあげ行列を迎える。

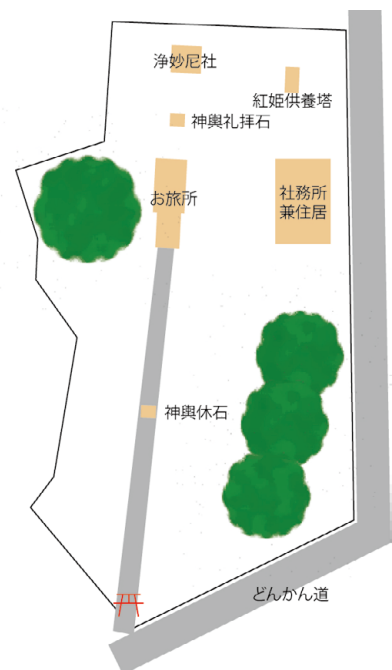
宰府宿の境である五条口近くに達した神幸の列は、六座の米屋座であった古川家旧宅跡でその歩みをいったん止める。同家には家運が傾いた際に夢に現れた天神（道真）が庭の梅を見よというお告げにしたがい見てみると黄金が入った巾着がかけであったと伝わる「金掛け梅」の伝承があり、現在も古川家の人々が揃いの法被と提灯でお出迎えをして感謝の気持ちを表している。同地にはその故事により金掛天神社が祀られている。

行列は宰府宿を抜け古代大宰府条坊のまち区割りが残る通りを進んでいく。沿道に一本のエノキの大木が繁っている。この場所は道真が治療し天寿を全うした某女の墓と言われ、エノキの根元には霊験あらたかとされている血方持観音が祀られている。行列は観音にはばかり楽を止めて進む。一方で、観世音寺では、菅原道真が配所で賦した詩「観音寺只聴鐘声（観音寺はただ鐘声を聞く）」にちなんで国宝の梵鐘が撞かれる。また、道真が天に無実を誓ったと伝えられる天拝山山頂では地元の人々により迎え火が焚かれる。暗闇の中、荘厳な鐘の音と遠くに煌めく炎はどんかん道のみならずまち全体が神幸式の雰囲気となる。

榎社は普段はクスなどの大木のこんもりとした緑に囲まれた静かな社である。かつては「佛堂



沿道の献燈（新町）



榎社境内模式図

一字残りて…釈迦、多寶二佛を安置す」（「筑前国続風土記」）と神仏習合の地であり、地元では今も榎寺と呼び親しまれ子どもたちの遊び場となっているが、神幸の時は人々が集い行列を迎えるにぎやかな空間となる。そのようななか神輿は榎社に到着する。神輿は天拝山の方を向く石鳥居（昭和3（1928）年建立）から入り、まず行宮の後方にあるもろ尼御前を祀る浄妙尼社の前に着輿する。浄妙尼社におごそかに奉幣が行われる。浄妙尼社はこの日ばかりは固く閉ざされた厨子の扉も開けられ、いつもは頭からすっぽり覆っている綿帽子も取られて、立膝をしたもろ尼御前像が姿を現わしている。もろ尼御前の子孫である権藤家により、社に幕が張られ、お供えをし、燈明が灯されている。権藤家については江戸時代後期の地誌「筑前国続風土記拾遺」にも「此頓宮は室の尼の社人権藤氏これを掌る。…室尼は権藤が祖なり」と記されている。

午後10時半ころ行宮に着輿すると奉幣、献饌祭が行われ一晩留まる。当日は神職が宿直をしている。行宮は本殿と拝殿に渡殿を設け連続した外観であるが、御旅所であるため通常は何も祀られておらず、御幣が置かれているだけである。文献上は江戸時代の「筑前国続風土記」にあらわれる「浄妙寺」にあたる。

【お上り】

神幸の二日目は、榎社から神輿が天満宮に戻るお上りである。午後1時半から行宮神輿の前で倭舞の奏上で始まる。4人の御巫子（みかん



緑に包まれた榎社



浄妙尼社



榎社お上り（天拝秘法）



参道を通るお上り

こ)による神楽舞である。笛とカイグリ(鉦)の調べに乗って、舞装束の童女が榊や鈴を持ってゆっくりと舞うのを、人々は開いた扉や連子窓から鈴なりに覗いている。その後、供揃え、出御祭を行い、午後3時に発輿となる。このころになると秋分の日でもあり秋の陽のなかの境内は見物の人で埋まる。

榎社を出る前に鳥居の中から天拝山に向かって権宮司が祝詞を声に出さずに奏上する「天拝秘法」が行われたのち神輿は榎社を出発し旧宅(南館)ともろ尼御前を後にするのである。経路はお下りと同じであるが、日中なので高張提灯などの灯火具は供奉していない。どんかん道を通り五条口を入った旧古川家前で再び出迎えを受け、大花車や幼稚園児らによる稚児行列を加えさらに華やかになった行列は参道を見物人をかき分けるように通りすぐに本殿へ戻らず、延寿王院の前を南に折れ一旦浮殿に入る。浮殿は本来心字池の傍に南面してあったものを、南の池の中島に移築したもので拝殿は文化年間(1804～1818)の建立とされる。浮殿前の舞台上徐々に陽が落ちる中、竹の曲による「御供上げ」の曲を奏する。続いて舞われる倭舞が終わるころには周囲は宵闇へと移っている。

午後6時半ころから神輿は暗くなる中を発輿し、ゆっくりと太鼓橋を渡り7時頃に本殿へ到着する。あたりが本闇に包まれたところで、お下りの時と同様、滅灯がなされ宮司により神霊は輿から本殿内陣へと還御され、神幸の無事終了を祝う竟宴が行われ竹の曲が舞われる。貝原益軒は「凡此時の儀式、よ所の祭のよそほいにすぐれ、いとしずかにして嚴重なれば、誰も見まほしき事におもへり。此国及となりの国の貴賤男女、神輿をおがまんとて、来りつどふもの夥し」(「筑前国続風土記」)と述べている。



浮殿に入る神輿



倭舞



竹の曲

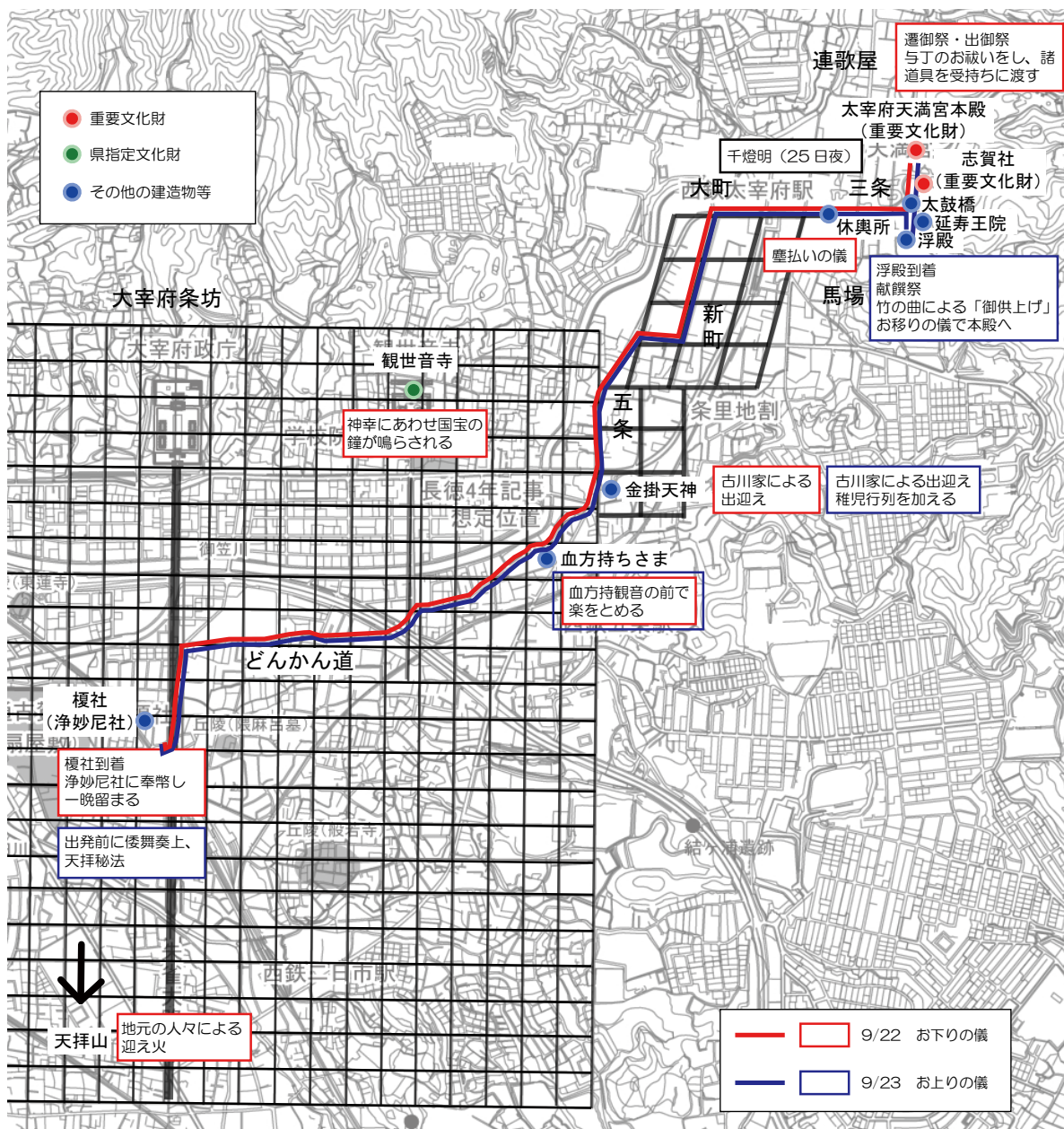


千燈明

【千燈明】

25日夜には、神霊を慰める千燈明が心字池や太鼓橋周辺で門前六町の若手によって灯される。各町で分担場所を決め、綱を張り針金を付けろうそくを立て準備をする。午後8時に若手祭典部長の号令で一斉に燈明を灯す。灯すのが遅れたところはきつく叱られるためみんな緊張して点灯する。多くの燈明が太鼓橋の朱と楠葉の緑を心字池の水面に照らし、心字池には舞台がしつらえられ巫女による神楽「悠久の舞」などが奏上され、幽玄な雰囲気が広がる。

このように天満宮と門前の人々を中心に行われる神事式は、道真の配所であり逝去の地である榎社や、道真の葬送の道であり、古代のまち区割を継承しているどんかん道、またその墓所である太宰府天満宮で行われ続けており、道真信仰と太宰府のまちの関係を今に伝えている。



神幸式における歴史的風致

2 さいふまいりにおける歴史的風致

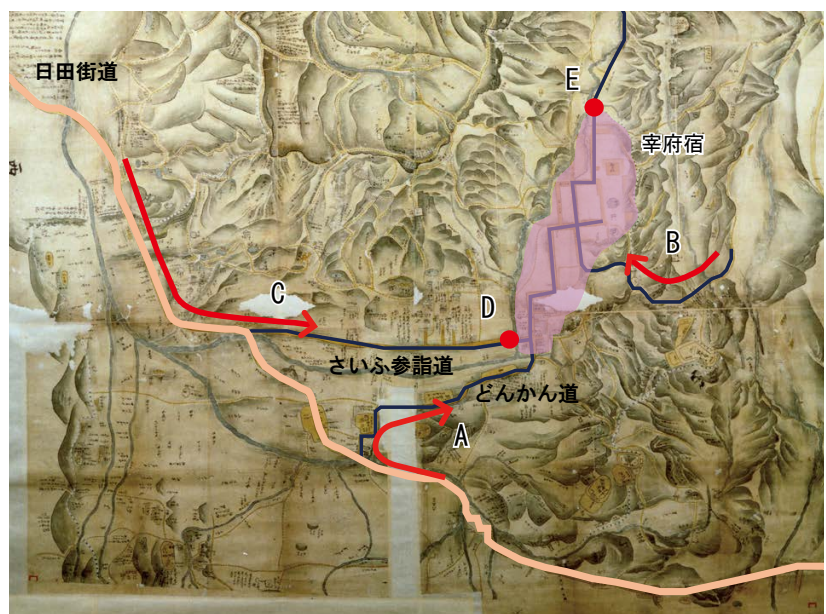
●さいふまいりとは

さいふまいりは文道の神、学問の神、としての信仰を集めた太宰府天満宮へ参詣するとともに、太宰府周辺の名所や旧跡をめぐり、歴史や文化に触れ楽しむ遊山の色彩を色濃く帯びる活動である。戦国時代末期の「九州の道の記」（木下長嘯子 天正 20（1592）年）には「宰府といふところは…拝み奉らんと詣でて。此方彼方名所ども見ありきしに…見所多かりけり」と記され、200 年後の江戸時代の絵師兼蘭学者である司馬江漢も訪れ「太宰府には古跡多し」（「江漢西遊日記」天明 8（1788）年）としている。

太宰府天満宮への参詣は平安時代より都からの官人や文人などにより行われていたが、江戸時代からは「さいふまいり」と呼ばれ庶民にも浸透していった。さいふまいりの「さいふ」は太宰府のことであるが、地名の「宰府」と、「本朝文粹」や「百練抄」、「菅家後集」など平安時代の文書に現れる都（みやこ）から西にある都督府があった地である「西府」の意味も含んでいた。特に江戸時代後期には「お伊勢参り」と同じように庶民が講を作り団体で訪れる旅が流行し、多くの人々が太宰府を訪れている。名古屋を出発し京、大坂を經由して九州に来た吉田重房は人の往来が多かったことを「此所（関屋）は肥前。肥後。薩摩。其外の国々より京江戸へ通ふ官道（おほどう）なれば。往来の人のしげきこと東海道も同じといへり。」（「筑紫紀行」文化 3（1806）年）と記している。

太宰府は江戸時代、黒田藩の宿場に指定され、主要街道である長崎街道や日田街道からの参詣道が整備されていた。長崎街道からは、太宰府に最も近い山家宿より日田街道の二日市宿を經由し「どんかん道」を通して南から太宰府に入っていた（A）。また、小倉側の内野宿から米の山峠を越えて東からたどる道（B）もあった。一方、日田街道は幕府直轄地の日田から九州の主要地へ向かう街道で「豊後国志」

（享和 3（1803）年）には 6 本が記録されているが、そのうちの一本が「筑前国宰府路・福岡城路」である。北からのさいふまいりの人々はこの道を通り参詣道を經由して太宰府に入っていた（C）。この博多から太宰府までの道の起源は奈良時代の官道（水城東門道）までさかのぼるが、現在も旧道として残っているほか、ほぼ同じ場所を県道



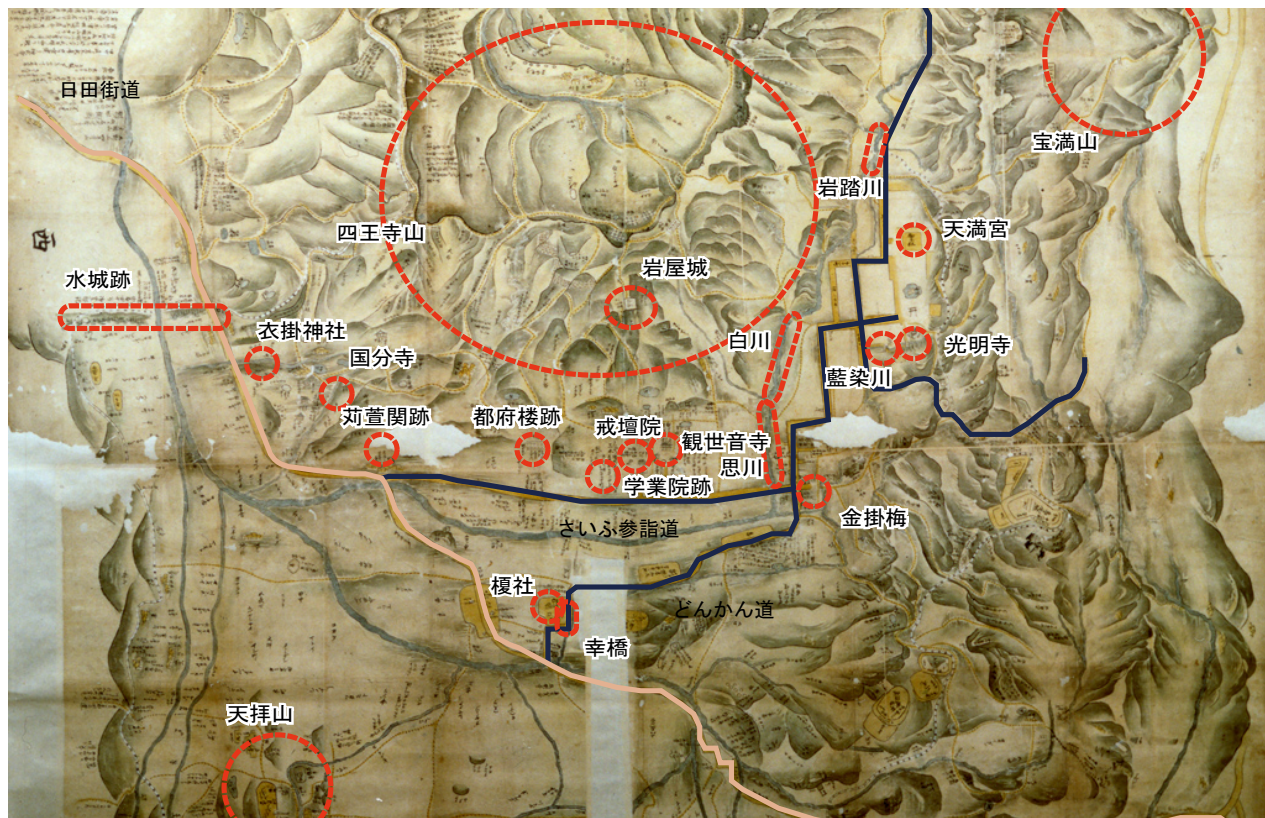
宰府宿への経路（太宰府旧蹟全図北（部分））

112号（旧国道3号）が通過し、博多方面から太宰府へ参詣する人々に利用されている。当時、街道から宰府宿への入口は4ヶ所あり、日田街道から参詣道を経由し御笠川を渡る高橋口（D）と香椎宮、宇美八幡宮から至る山上口（E）では、宰府宿に入るにあたり身を清めていたと言われ、付近には二見が浦（伊勢）、和歌浦（紀州）、箱崎浦（筑前）の潮井を集めたとする通称「三浦の（石）碑」が残っている。

当時の紀行文には、さいふまいりの人々が宰府宿の宿屋や社家の宿坊などに宿泊しながら、水城跡、苅萱関、都府楼跡、四王寺山、観世音寺、戒壇院、榎社、光明寺、藍染川などの名所、旧跡を訪れた見聞が記されている。名所図絵なども出版され、紀行文とともにさいふまいりの案内書ともされていた。また、「博多太宰府図屏風」のように博多から太宰府までの賑わいが、屏風の画題にもなるほどさいふまいりは定着したものであった。



江戸時代のさいふまいり（博多太宰府図屏風（太宰府部分））



さいふまいの街道・参詣道と太宰府旧蹟全図北（部分）

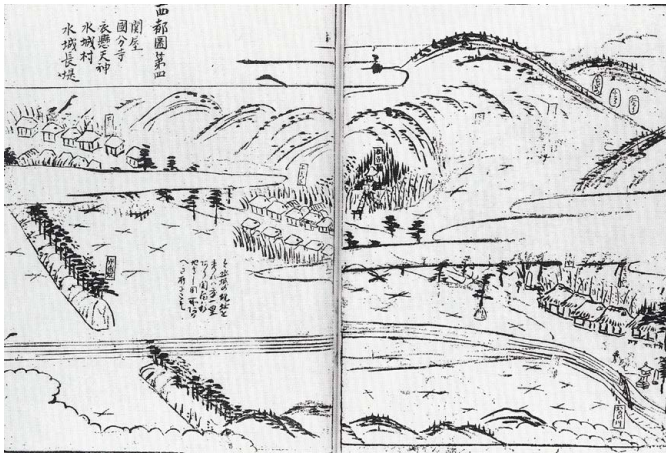
書名	年代	年	西暦	1 四王寺山	2 岩屋城	3 水城跡	4 衣掛神社	5 苅萱閑跡	6 都府楼跡	7 学業院跡	8 観世音寺	9 戒壇院	10 国分寺	11 榎社	12 幸橋	13 天拝山	14 藍染川	15 光明寺	16 白川	17 思川	18 岩踏川	19 宝満山	20 天満宮	21 金掛梅
筑紫道記	文明	12	1480			○		○	○		○	○				○	○			○		●	○	
九州道の記	天正	15	1587					○			○	○					○			○		●	○	
九州の道の記	天正	20	1592														○			○			○	
九州下向記	慶長	3	1598	●				○	○		○					●	○						○	
日本行脚文集	貞享	2	1685	●				○	○		○						○			○		○	○	
長崎行役日記（往路）	明和	4	1767						●		○	○	○	○		●						●	○	
西国筑紫紀行	安永	2	1773					○								○							○	
西遊雑記	天明	3	1783	○	○			○	○		○					○						○	○	
金谷上人行状記	天明	6	1786			○		○	○		○	○				○							○	
江漢西遊日記	天明	8	1788								○	○											○	
つくしの道の記	寛政	2	1790				○				○	○		○		○	○	○					○	
太宰府紀行	寛政	8	1796						○		○	○		○		○	○	○				●	○	
筑紫旅行日記	享和	1	1801						○					○		○		○					○	
筑紫紀行	文化	3	1806	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○				○	○	○	○	
狂歌西都紀行	文化	4	1807	○				○	○		○	○			○		○		○	○			○	
九州九峰修行紀行	文化	10	1813						○		○	○	○			○						○	○	
西遊漫記	文政	3	1820					○	○							○						○	○	
薩陽往返記事一回往路	文政	11	1828						○	○	○			○								●	○	
筑紫日記	文政	13	1830	○		○		○	○		○	○					○					●	○	
薩陽往返記事二回復路	文政	13	1830						○		○			○									○	
西遊日記	天保	2	1831					○	○		○	○		○		○							○	○
長崎日記	天保	4	1833			○		○	○		○	○				○			○				○	
薩陽往返記事六回復路	天保	8	1837					○	○		○												○	
安楽寺詣日記	安政	4	1857						○		○	○										●	○	
筑紫日記	安永	7	1860					○	○										○	○			○	
西遊日記	慶応	1	1865			●			●		●					●						●	○	
筑紫の道の記	近世			○	○	○		○	○		○	○					○	○				○	○	

紀行文によるさいふまいり立ち寄り場所一覧

（●は望見のみ）

●さいふまいりの様子

日田街道を博多方面から太宰府に向かうとまず「水城の関」にぶつかる。水城跡は天智3（664）年に大陸からの侵攻に備えて大宰府防衛のために地峡を塞いだ、長さ1.2km、幅80m、高さ9mの長大な土塁であり、特別史跡に指定されている。室町時代の「筑紫道記」に「大きな堤あり。いはばよこたはれる山のごとし」と記された緑に覆われた土塁は、現在も存在感を示し太宰府への入口であることが感じられる。



水城長堤（筑前名所図会 西都図第四）



現在の水城堤

水城跡を過ぎるとすぐ衣挂神社に至る。この周辺には菅原道真の伝承が生きている。「筑紫紀行」には「（道真が）太宰府に近づき…御旅路の御馴衣脱給ひて、傍なる石にかけさせ給ひしによりて、後に宮を建て、彼石を衣挂天満宮といつきまつれり。その石は今猶御社の側にあり」と解説している。現在は「その石」は社の側でなく衣挂神社下の人家に取り込まれている。また、道真がやつれた自らの姿を映したとされる「姿見池」も神社の脇に近年まであった。

水城跡から苧萱関跡までの日田街道では四王寺山の風景の広がりを見つつさいふまいりを楽しんだ。四王寺山は標高400mほどの山で、古くは大野山とも呼ばれる。水城とともに大宰府防衛のための山城「大野城」が築かれた山（「日本書紀」天智4（665）年で、万葉集でも山上憶良が「大野山 霧立ちわたる 我が嘆く おきその風に 霧立ちわたる」（巻5－799）と詠ったのをはじめ、多くの歌枕となった山であり、さいふまいりの立寄り所である。現在も江戸時代の絵図にある樹木茂れる四王寺山の風景を見つつ苧萱関跡まで辿ることができる。また、山麓には市民の森が設定され多くの人々が訪れるとこ



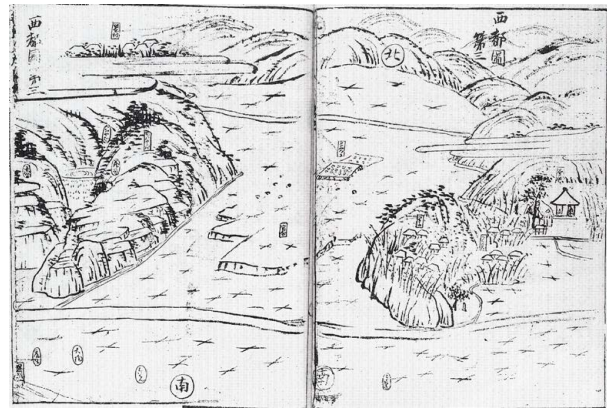
関屋（筑前名勝画譜）

ろとなっている。

菰萱関跡がある関屋は日田街道と太宰府参詣道の分岐点にあたる。右へ御笠川を渡れば日田街道、左に天満宮一の鳥居をくぐれば参詣道である。「菰萱の 関守にのみ見えつるは 人も許さぬ道辺なりけり」（「新古今和歌集」菅原道真）など古来より歌枕として著名で多くの歌が詠まれている。また、説教節や浄瑠璃、歌舞伎の題材になった「菰萱道心と石堂丸」の説話の地でもある。現在も文久2（1862）年に黒田斉溥により寄進された一の鳥居、享和2（1802）年の銘を持つ石燈籠や潮斎台、また、元禄4（1691）年銘を持つ「是ヨリひがしさいふ参詣道」の道標があり追分であることを示している。

参詣道を東へ行くと四王寺山（特別史跡大野城跡）を背景に都府楼跡が現れる。都府楼跡は古代に設置された地方最大の官衙、大宰府の中心である政庁の跡である。司馬江漢の「西遊日記」には「都府楼の跡と云。何にせよ、すぎましき殿ありと見えたり」と田中に散在する礎石に感心している。道真が配所の南館で賦した「不出門」中の一節「都府楼纔看瓦色（都府楼はわずかに瓦色を看る）」から「都府楼」と称されるようになっている。現在は中心建物であった正殿跡には地元の人々による顕彰碑が建ち旧跡を伝える意思を示す。北の四王寺山、東西の蔵司、月山の緑に囲まれ、人々が思い思いの時を過ごす広々とした空間である。

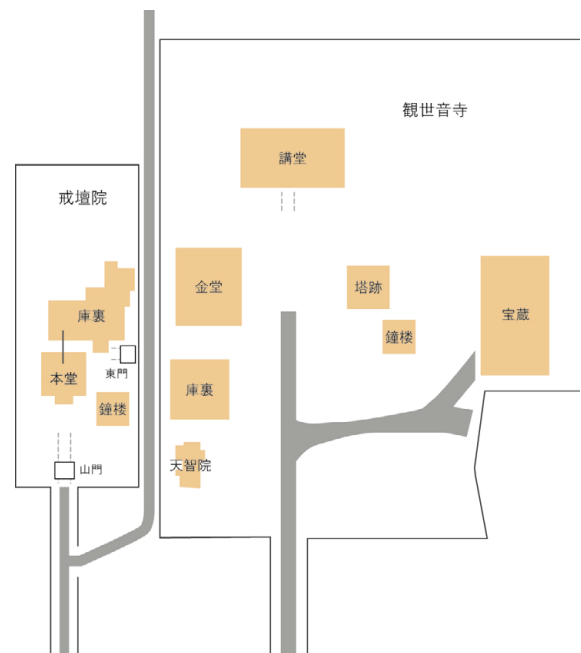
さらに東に進めば、紀行に「学業院跡」とあらわれる大宰府学校院跡を通過し、観世音寺、戒壇院と名所旧跡が連続している。観世音寺は天智天皇が母である斉明天皇を供養するために飛鳥時代に発願した寺である。現在は楠の並木道を抜ける



都府楼跡・四王寺山（筑前名所図会）



現在の都府楼跡（後方が四王寺山）

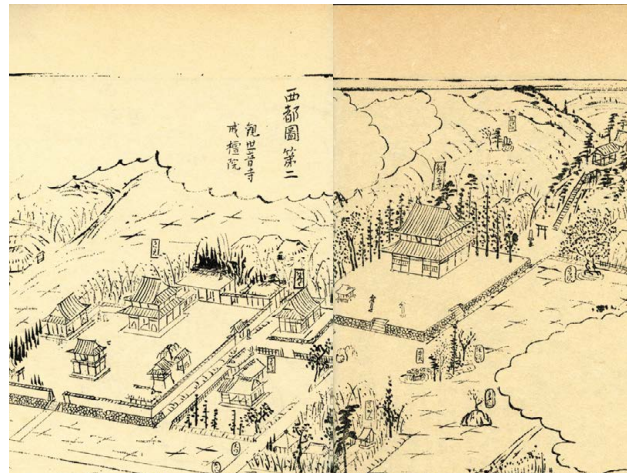


観世音寺・戒壇院境内図

と木々に囲まれた広場に出て、江戸時代に再建された、講堂（正面、福岡県指定有形文化財）、金堂（左手、福岡県指定有形文化財）がある。また、右手にはかつては威容を誇った五重塔の芯礎が木々の間にひっそりとある。さらに奥の鐘楼には国宝の梵鐘がかかっている。講堂は創建の時から同所で建替えられており、「延喜五（905）年観世音寺資財帳」に記される平安時代の礎石が講堂の周りに並び、その大きさと歴史を伝えている。観世音寺は鑑真和上が逗留していたこともあり、和上が導入した僧尼の受戒に使用する「戒壇」が寺の西側に置かれ、戒壇院とされた。江戸時代に観世音寺から独立し現在に至るが、観世音寺から戒壇院の雰囲気は一体のものとして感じられる。お線香の香りが漂う楠の緑陰を三々五々訪れ、人々の寄付により昭和34（1959）年に落慶した宝蔵に安置された仏さま（14体が重要文化財）に詣でる人々の姿は、観世音寺、戒壇院の風景の一つになっている。

天満宮に近づく「伊勢物語」や「後撰和歌集」、「拾遺和歌集」などに数多く詠まれた歌枕である「思川」や「白川」、「岩踏川」、「（藍）染川」に至る。「思川」「白川」「岩踏川」は宝満山を源流に太宰府を西流し、後に北流して博多湾へ注ぐ御笠川のことであり、宰府宿付近では四王寺山の山裾を南に流れている。「（藍）染川」は謡曲「藍染川」の伝説の舞台であり、「筑紫紀行」に「此川は花園山にそひて、伝衣塔の傍にながれ出る小川なり…此川の中に古墳（梅壺侍従蘇生碑）あり」とされるように、現

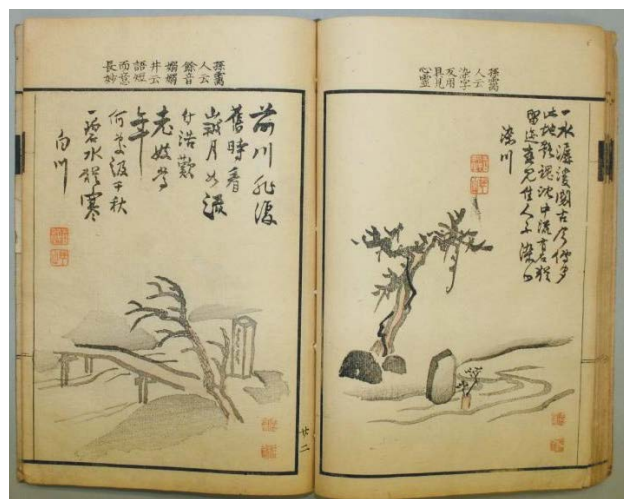
在も藍染川と梅壺侍従蘇生碑を人々は歌枕に惹かれて訪れる。また、周囲には渡宋天神伝承により創建され今では美しい庭園を持つ光明寺と伝衣塔があり、賑わい大きい参道の近くでありながら静かな落ち着いた場所となっている。



観世音寺・戒壇院（筑前名所図会）



現在の観世音寺・戒壇院



白川・染川（太宰府十二勝）

そして天満宮への参詣となる。現在も参道から延寿王院の前を北へ折れると「反橋高うして二つあり。…池のめぐりには千万株の梅の林をなせり。覚えず西湖の境に来たるやと覚ゆ。楼門に入るほどかうかうしくて。左右の回廊いさぎよし。名におふ飛梅苔むして」（「筑紫道記」）と記された風景が同様に広がっている。また、「かくて御本殿の御前にまゐりて頓首再拝」（「筑紫紀行」）したのち、回廊にある授与所で御守りを受ける姿は、「初穂持参、梅守銀一両宛、札守十二銅宛」（「太宰府紀行」）としていた江戸時代のさいふまいの様子と同じである。

さいふまいの情景を描いた多くの絵画資料から、参詣者の多様な姿が見てとれる。併せて参詣者が歩く道に開くように戸口を解放した建物が多くみられ、旅装束の人々が座る姿から、参詣者に対する休み処が各所に開かれていた。

当時、さいふまいりに訪れた人々の紀行文に、「右には水茶や軒をならべ梅が枝てふ餅をうる。」（『狂歌西都紀行』江戸期）、
「並に摂待茶屋美麗に懸物生花、色々物ずきの作り也。前後左右宮中茶屋に而ふさぐ」「其外社中の小茶屋数多し。」（『筑紫旅行日記』抄 享和元（1801）年）、
「側なる茶店に立ちよりて昼のかれひ（乾飯）たうべなんどして夫より観世音寺に詣づ」（『安楽寺詣日記』安政4（1857）年）、
「参道でソバ（式拾四文盛のソバ）・焼餅（焼餅を食して）」（『富永徳助嘉永三年日記』）と記され、茶屋をはじめ、焼き餅（梅ヶ枝餅）、ソバ、梅が売られていた。また、日田街道とさいふまいり



天満宮境内絵図（慶応3（1867）年）



関屋（筑前名勝画譜）



観世音寺（博多太宰府図屏風）

の道が分かれる関屋では「関屋のつなぎだご」が、山家からさいふへ入る石坂には峠の茶屋があり、岩間から出る清水とともに夏は冷たいトコロテンが名物であったと聞く。さらに土産物として「こぼれ梅」「焼き餅」「木の盆」があり、木の盆には客の前で参拝記念の月日や名前などを彫って売っていた。

当時の様子を「いろいろ茶てんなんど、いとにぎはひたり。」（『道の安良・五月雨



新町・五条（博多太宰府図屏風）

紀行』抄 文政8(1825)年)と伝えている。太宰府のお茶は、黒田長政より茶の実10石を拝領し、内山の九重原付近を茶園にしたという記録（『竈門山旧記』江戸中期）や、明治13(1880)年に記された『福岡県地理全誌』には「北谷村」の項目に土産物として「茶」が記載されており、これらのお茶が、さいふまいりに来た人々の喉を潤している。

宰府宿の旅籠では、「於泉屋二階ニ而昼休也、鶏・家鴨等を生作りニ而醤油ヲ掛ケ食シ」（『公儀御役々并伝習方勝麟太郎様蘭人一同十月十八日博多御上陸翌十九日宰府参詣同所御立雑餉隈小休諸事留書』安政5(1858)年10月)と記され、太宰府市内の農家では、今も「もてなし」の料理として「かしわ（鶏）ごはん」をはじめ、時には鶏肉の刺身がふるまわれる。



かしわごはん（左下）

このような太宰府参詣が現在に至るまで続いているのは道真の文才や不遇な晩年の物語に負うところが大きく、「学問の神」「文道の神」として時代を超えて多くの人々か

ら信仰を集めている。すでに平安時代には「文道の祖・詩境の主」（慶滋保胤、寛和2(986)年)や「文道の大祖、風月の本主」（大江匡衡、寛弘9(1012)年)と称賛され、時代を経るごとに貴族から武士へ、武士から庶民へと広がっていった。文学も詩文から和歌、連歌、俳諧まで分野は広まり、これらの会では「南無天満大自在天神」の名号や天神の画像が上座に掲げられてきている。さらに江戸時代以降、寺子屋の守り神とされたことにより一気に広がり、教科書には「菅丞相往来」「菅家御遺訓」「天神往来」など道真に関わるものが多く使われることとなった。また、芸能でも題材として取り上げられ、謡曲「雷電」「老松」や浄瑠璃「天神記」（近松門左衛門作 正徳4(1714)年)、特に「菅原伝授手習鑑」（竹田出雲ほか作 延享3(1746)年)は人気を博し、天満宮が「学問の神」であることが浸透する。

太宰府天満宮ではこのような背景をもって、昭和5年に「文祖の神符」の頒布を開始している。

福岡日日新聞には「全国小学児童に 文祖の神符を授く 太宰府神社の企て 学業成就試験地獄救済」と見出しが出ている。

「文祖菅公を祀る官幣中社太宰府神社にては従来学業成就の祈願申出多く満州朝鮮などよりも成績



現在の学業御守り（赤破線内が学業御守り）

品を送り来りて試験地獄救済の祈願をなす者続出するに鑑み、今回宮司西高辻男爵の名を以て日本全国は素より満州朝鮮及海外の在住邦人の小学校に向け御神符を頒布する事となったが、此の報一度伝わるや関東北海道方面を始め各地より続々神符頒布申込あり社務所にては此れが発送に忙殺されているが、神符は「学業上達御守」と「御守袋」の二種とし何れも絹地にて護し初穂料は一箇につき五銭を受け貧困児に対しては無料にて授与し申し込み学校に対して太宰府神社全景のコロタイプ写真一葉を無料で贈る由」（昭和5（1930）年4月11日付）

これが学業御守りのはじめとされ、現在は学業上達、受験合格の祈願の神符や学業御守、御札が授与されている。その他、合格鉛筆など多彩である。

現在も楠の大木と天神の森に囲まれた太宰府天満宮には一年中参詣者が絶えることなく訪れている。特に、正月は参道には人があふれ、心字池にかかる太鼓橋で立往生し、境内に入っても本殿に近づくのも一苦労する。本殿前には大きな賽銭箱が設けられ、遠くから投げしてお祈りをする人もいる。一年の計をおみくじで占い一喜一憂する人々。3月までは学業成就、合格祈願の人々で賑わう。御守り授与所では試験に持って行く御守りだけでなく答案を書く御守り鉛筆も受けて帰る。



初詣で賑わう本殿前



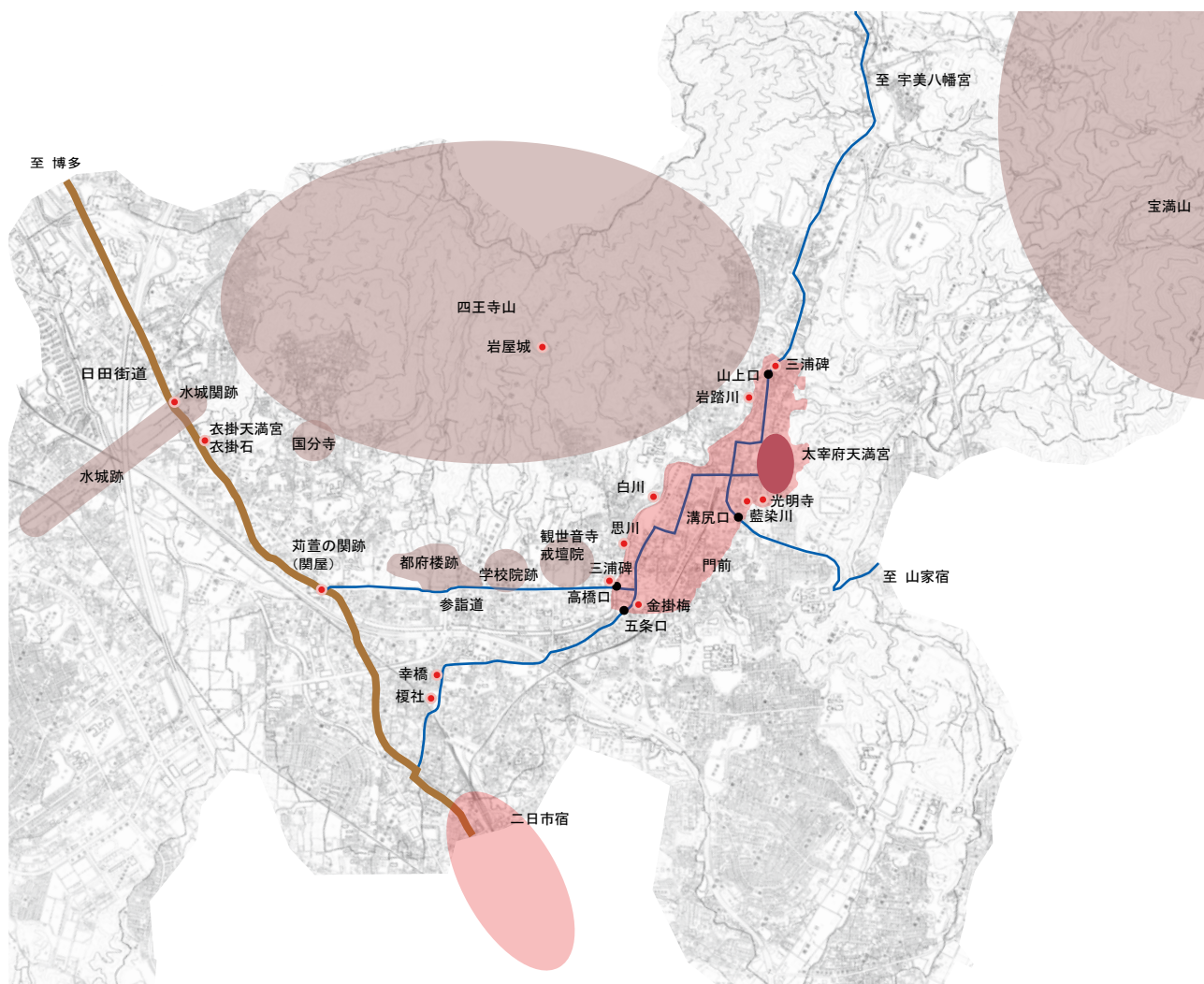
鈴なりの絵馬



おみくじに一喜一憂

初夏から秋にかけては修学旅行で参詣する全国各地の学校の制服が行き交い、海外からの人々の団体はガイドを頼りに参詣に向かう。参詣の前後には都府楼跡や水城跡などの遺跡や観世音寺、戒壇院、光明寺などの古刹、荇萱関跡や藍染川、思川などの歌枕などを訪れ歴史に思いを馳せながら散策をする。

このように、さいふまいりは太宰府天満宮参詣を含め、ひろく「西府」の歴史と文化を楽しむ遊山であり、その伝統は太宰府天満宮をはじめ太宰府の各所に残る立寄り所や周辺の風景とともに今に伝わっている。



さいふまいりにおける歴史的風致

3 太宰府天満宮門前の生活にみる歴史的風致

さいふまいりの人々で賑わってきた天満宮周辺の門前は、江戸時代の伝統を引き継ぐ茶店、土産屋が軒を連ねる参道を中心に小鳥居小路、溝尻に加え神苑の茶店など現在も賑わう参詣者をもてなしている。

●門前の由来

太宰府天満宮門前は平安時代に菅原道真の霊廟が開かれたことにより大宰府条坊の北東郭外にまち区割が形成されたことに始まる。江戸時代には宰府宿として多くの参詣者で賑わい、晩年を太宰府で過ごした斎藤秋圃の「博多太宰府図屏風」（天保11（1840）年）には檜皮葺の延寿王院や瓦葺き社家屋敷、大町には宿屋と目される瓦葺き2階の家並があり、新町・五条と下ると草葺きの店が連続し、その中を多くの人々が往来している様子が描かれている。また、紀行文にも「…宿坊宿屋の賑ひ五十鈴川にもおとらじとおもふ」（「狂歌西都紀行」 含笑舎抱臍 文化4（1807）年以前）と伊勢神宮と対比する形で賑やかなさまを伝えている。



大町・馬場（博多太宰府図屏風）

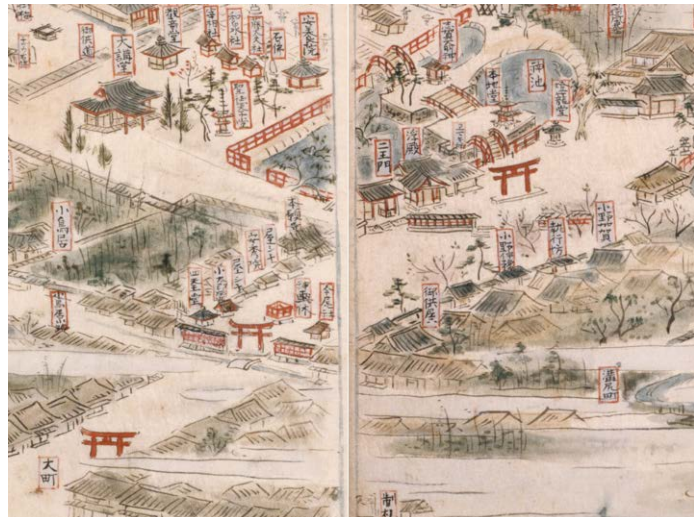


新町・五条（博多太宰府図屏風）

●門前の様子

現在の天満宮門前はおよそ宰府宿の範囲、門前六町と言われるエリアである。門前六町は三条（山上）、連歌屋、馬場の上三町と大町、新町、五条の下三町に分かれており、江戸時代の門前の棲み分けを反映している。かつて上三町は天満宮に奉仕する社家町で、別当家をはじめ宮師（宮司）、三綱、文人、衆徒のほか特定の役職を持った社家約60家の屋敷が並び、さいふまいりの宿坊としても利用されていた。一方、下三町には特に大町を中心に大きな宿屋や商家があり、新町から五条には商人や職人あるいは農民が住しており商家、町屋、地主屋敷、農家などがあつた。門前の明治から大正生まれの人々は、子どものころは上から下、下から上に遊びに行くことはほとんどなく、行く時は人が見えない時にさっさと行っていたと言い、往時の雰囲気伝えてい

天満宮参道は上三町に属する馬場参道と下三町の大町参道にまたがっている。かつては境内と町方を分ける石鳥居・斎垣や溝があり、視覚的にも結界を意識させるものであった。現在は参道と交差する小鳥居小路―溝尻と鳥居、溝にその名残を留めている。また、参道を天満宮へ向かうと両側のまち並みと鳥居の背後に天神の森が緑の背景として現れ、天満宮から参道へ向くと四王寺山の山裾の緑が同じように背景となって参道の風景を形作っている。



参道の石鳥居・斎垣・水路（筑前国続風土記附録）

参道以外の門前も、小鳥居小路―溝尻は一般商店で賑わい、俗謡に「溝尻口の狭いから お祭りごとに おっせしがっせししょう（おまつりのように押し合いしている）」と唄われるほどであったし、新町・五条についても商家や職人の家が軒を連ねていた。「筑紫紀行」（文化3（1806）年 吉田重房）に当時の門前の様子が詳しく描写されている。

「十丁ばかり行けば、太宰府に至る。（五条から）町屋千軒ばかり、六七丁もたちつづけり。町中（大町）に銅の鳥居たてり。又一丁ばかりゆけば。一の鳥居とて大きな石の鳥居あり。鳥居の前に下馬札たてり。銅の鳥居より此鳥居まで。一丁あまりの間は茶屋宿屋のみなり。大野屋といふ宿屋を休み所と定め置て。供の男にもたせたる荷物をも此宿にあづけさせて。案内のものを求めて参詣す。かくて一の鳥居に入れば。桜の馬場といひて。左右に桜の木多数生たり。」

●もてなしを続ける門前

明治維新は太宰府天満宮と門前にとって大きな衝撃をもたらした。神仏分離、境内地を除く寺社領の没収、社家の奉仕が禁止されるなどにより、社家の困窮をもたらした。茶店・土産物屋を開店したもの、教師や官吏となり太宰府を離れたりとさまざまであった。特に大きな社家は敷地の細分化が進み、住宅のほか多種の商人の定住が進み、商家や宿屋、芝居小屋（梅楽座）、券番などへ変化していった。このため、馬場参道が明治時代以降の建造物で占められるのに対し、大町参道には江戸時代の宿屋建築が残ることになった。一方、天満宮境内で営業していた茶店の茶屋株が廃止され、大正5（1916）年には15軒に制限し境内の目立たない位置に移転することとなり、現在は10軒が神苑で営業している。

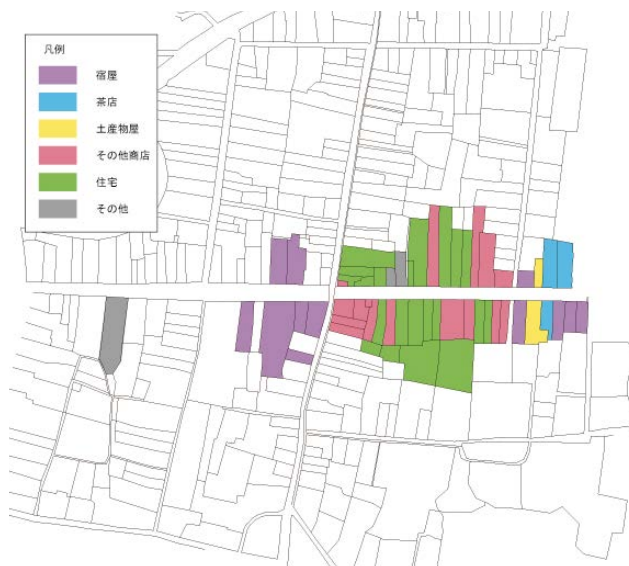
門前は古くから人が来続けていることが特徴の一つであるが、そのために社会状況にあわせて、商売も変化してきている。明治以降は社家地であった馬場参道に甘木屋やみどりや・中村屋・三



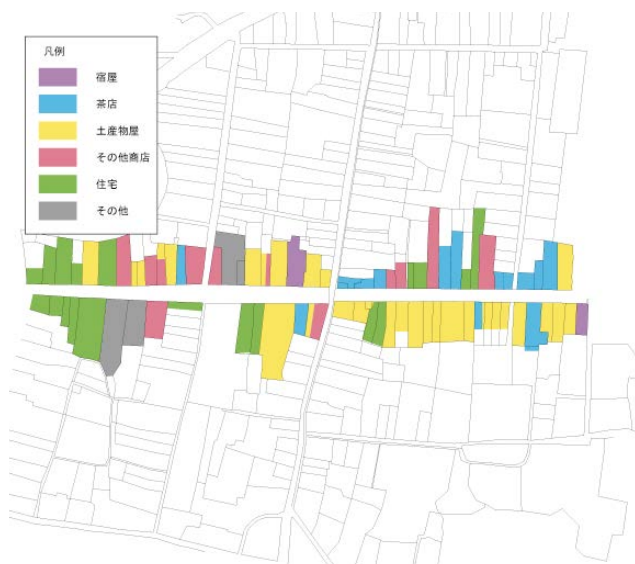
門前の範囲と歴史的建造物の分布



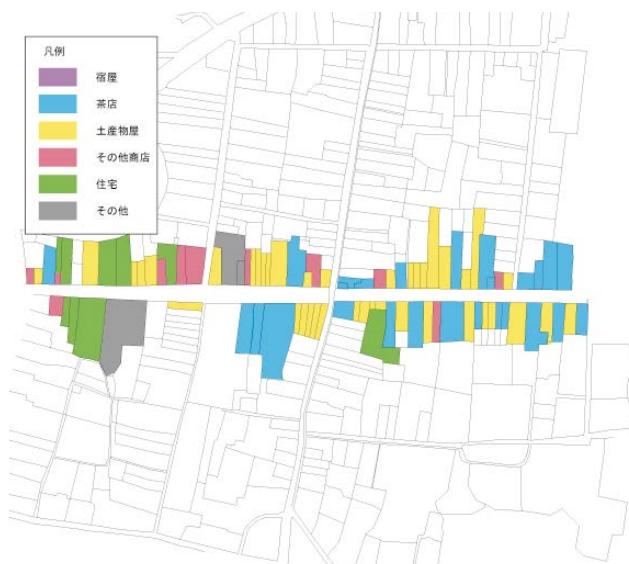
江戸時代の社家地の分布図



参道の生業分布図（明治後期）



参道の生業分布図（昭和34年）



参道の生業分布図（現在）

	明治後期	昭和34年	平成21年
宿屋	11	2	0
茶店	3	15	23
土産物	2	26	37
その他商店	13	12	12
住宅	15	18	8
その他	3	4	3

参道の生業の変遷

橋屋などの宿屋、松嶋屋・仁和加屋などの茶店、土産物屋、小田家（生糸）・古川家（百貨店）・杉村家（雑貨屋）・中神家（和傘）・松尾家（和菓子）など一般商店が入り、大町同様参詣者をもてなした。その後、参道の伝統的産業であった宿屋は戦後減少し、平成2（1990）年に最後の1軒である大和屋が廃業した。茶店は土産物屋とセットになったり、喫茶店や飲食店となり存続している。増加しているのは土産物屋である。木鷲、博多人形などの民芸品、受験合格縁起ものの小物から、梅ヶ枝餅をはじめ梅干しや梅酒などの食品、菓子類が中心である。品定めをしながら天満宮に向っていく参詣者への呼び込み、商品の味見を勧めるタイミングには年季を感じさせる。また、明治になり天満宮を離れた社家により写真館も始められた。現在でも4軒が境内などで楼門や梅をバックに集合写真を撮影するなど営業している。

このような参道の変化の中で16棟が今も江戸時代から昭和初めまでの歴史的建造物で営業を続けている。特に大町参道には、江戸時代の宿屋であった泉屋、大野屋、松屋、大和屋、日田屋の5棟の建物が生業を変えながらも営業している。

その他、三条から五条までの通り沿いも宿屋（高田家）や絵師（吉嗣家、萱島家）、地主（西山家、斎藤家）、鍛冶屋（高田家）、商家（木村家）の建物が散在し門前の面影を伝えている。

古くから変わらない名物に梅ヶ枝餅がある。参道と神苑の31軒で製造販売している。もち米とうち米を7対3から9対1くらいの割合で混ぜた米粉を良くこねて小豆餡を包んで、型に入れて焼いたもので、小豆餡は各店によりこだわりがあり、店の個性は餡の量や甘さに現れている。



大正期の参道風景（正面に銅の鳥居）



現在の参道風景



写真館での記念撮影（昭和30年代）



天満宮境内での記念撮影

参道にほんのりとただよう香ばしい
 においは、どこことなく郷愁を誘う。
 菅原道真が亡くなった時それまで世
 話をしてきたもろ尼御前が餅に梅の
 枝を添えて捧げた、という伝承が由
 来とされる。江戸時代には狂歌師太
 田蜀山人の「小春紀行」（文化2
 （1805）年）にも「宰府の検校坊よ
 り海陸安全御守と梅かえといふ餅一
 箱もて来れり」とその名が見える。



梅ヶ枝餅を商う図（絵本菅原実記附不知火草紙）

梅ヶ枝餅は参詣の土産や、社家が地方へお札などを配り
 に回る際の土産になるなどして広がったと伝えられる。

「絵本菅原実記附不知火草紙」（江戸時代）には梅ヶ枝
 餅を商う図があり、遠くに参詣する人々が見え、近くに
 茶店風の建物の前で売り子が七輪で餅を焼きながら売っ
 ている。さらに手前にはさいふまいりの人々が楽しげに
 梅ヶ枝餅を食べながらそぞろ歩いている様子が見える。
 明治45年に行われた東京実業之日本社主催の「各地方
 の名物競」では梅ヶ枝餅は15等であり（明治45(1912)
 年2月24日福岡日日新聞）、全国的に知られる太宰府
 の名物となっていた。



店先での梅ヶ枝餅丸め

第二次大戦後は梅ヶ枝餅の品質向上と規格化の努力が
 本格化し、太宰府梅ヶ枝餅協同組合が設立され物資不足
 の中、材料の共同仕入れをするなどしていた。昭和33
 年の梅ヶ枝餅の基準は一個十二匁以上、餡一升到白砂糖
 三斤以上使用、化学調味料は使用不可であった（昭和



梅ヶ枝餅焼き

33(1958)年3月6日西日本新聞)。このころから、炭火の七輪からガスの焼き台となり、量を多
 く焼くことができるようになり、昭和54(1979)年には1個50円で、年間販売は1,000万個以上
 であったという（2月24日西日本新聞）。正月の繁忙期には門前周辺の北谷、内山、松川や高雄
 地域の農家の女性が出稼ぎに来ており、食事の間もないほど忙しく焼き続け、器用に包装して次々
 に参詣者を呼び込んで商売をしている。参詣の人々も江戸時代の草紙同様、行き帰りに賑わう参
 道の店々を楽しみながら、気の向いたところで焼きたての梅ヶ枝餅を買い食べ歩いている。また
 神苑の茶店で境内の風景を眺めながらゆっくり味わう人々もいる。

●門前で受け継がれる行事

門前には古くからの行事も根付いており、今日まで続いている。鬼すべは太宰府天満宮に古くから伝わる追儼であるが、門前六町の奉納行事である。1月7日の夜に天満宮の鬼すべ堂で鬼と鬼を燵（くすべ）る役に分かれて、大松明を用いて攻防戦が繰り広げられるが、代々役割が決まっている。鬼係、鬼警固は下三町が行い、敵方の燵手（すべて）は上三町で行われている。

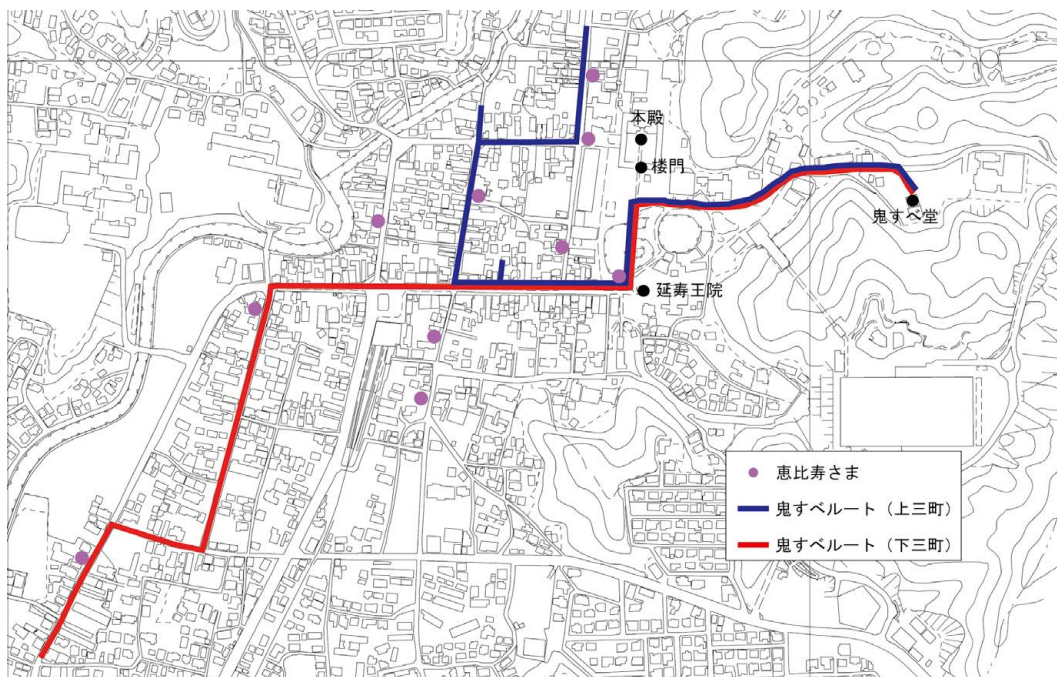
恵比寿さまは商売繁盛・宿場の守り神として、路傍のあちこちに祀られており、近所の4～10軒ほどの家が組を作ってお世話をしている。12月2日の宵恵比寿に当番が注連を張り、供物を供える。3日は三条では「ナナトコマイリ（七所詣り）」、連歌屋では「トウゴマイリ（十ヶ所詣り）」と呼んで、朝暗いうちから組で連れ立って各所の恵比寿さまにお参りして廻るのを習慣としている。



鬼すべ（参道）



溝尻の恵比寿



鬼すべのルートと恵比寿さまの分布

55